

## 学劇「都市の再創造—20年後の大阪」

セッション10は、セッション9を除く全てのセッションのコーディネーターが一堂に会し、テーマである「都市の再創造 20年後の大阪」について語る。通例であるとして、セッション毎のまとめを報告し、総括の討論を経て大団円となるのであるが、今回のシンポジウムのキーワードのひとつは「創造性」であり、創造性こそが都市再創造の実践や研究を切り拓いてゆくキーととらえ、セッション10を単なる口頭発表からドラマへと創造的に転位させることとした。それが「学劇(学術演劇)」である。特に災害や経済の大きな困難を背負っている現在の私たちが、ベターな未来をたぐり寄せるには創造性が必要であると考えてのことである。かつて19世紀にドイツの作曲家であるリヒャルト・ヴァーグナーが総合芸術としての楽劇を考案し、オペラ、交響曲、バレエ、演劇、文芸等を立体的に組み合わせ、舞台芸術の革新を成し遂げた。それは今日までバイロイト音楽祭として引き継がれ、ヨーロッパで最も水準の高い芸術祭のひとつとして評価されている。我々の学劇は、ヴァーグナーのロマン主義的な美学を受け継ぐものではないが、その総合性を学び、多角的な都市研究を統合するひとつの方途として、学術や芸術が豊かに響き合う場になってほしいと新たに考案されたのである。

演劇は基本的に虚偽の時空間をつくる。それが虚偽であるから、いっそうリアルに私たちに迫ってくる。一方、学術はまさに真理を追究するものであるから、虚偽を根本とする演劇とは対照的な緊張関係をなす。その際どい稜線を歩いていこうというのである。近年、学術的成果の発表、公開のスタイルに変化が見られる。テレビではマイケル・サンデル(ハーバード)教授ほかの白熱教室やTEDなどが評判を呼んでいる。大学教育においてもeラーニングシステムがどんどん導入されつつあり、表現に工夫が凝らされている。知や経験についての新たな伝え方が急速に展開しつつあるのである。本学劇もそういった面への貢献となることを願ってやまない。

ドラマは20年後、すなわち2033年の大阪が舞台である。そこにはどんな大阪があるのか。どうかお楽しみいただければ幸いです。

### 【出演】

三田村 宗樹(理学)  
水内 俊雄(都市研究プラザ)

森 一彦(生活科学)  
中尾 正喜(工学)  
橋本 秀樹(複合先端)  
渡辺 恭良(医学)  
大仁田 義裕(理学)  
川村 尚也(経営)  
嘉名 光市(工学)

Aung Myat Win(創造都市・ミャンマー)  
Mircha Anton(創造都市・ロシア)  
Kiener Johannes(文・オーストリア)  
Trinh Quy Lon(工・ベトナム)  
Jeon Eunhwee(文・韓国)  
Jin Shengdi(工・中国)

江刺家 拓真(文3)  
松本 朋子(文3)  
丸岡 あい(経済3)  
乾 勇斗(経済2)  
谷口 正樹(文2)  
中山 陽次郎(工2)  
上山 智章(文1)  
増村 美聖(理1)

### 【演出】

中川 眞(文学)  
財田 啓史(補佐・文M1)